光

第二十一輯

大正十二年三月

◇往還二相……西田天香

◇生きるためには死なねばならぬ……西田天香

◇一つの申出で……松下吉衛

◇光明へ……八田勝三

同人懺悔報恩の奉仕者

祈願不二の光明によれる生活

費用供養されたる浄財

◇白道に立ちて……住田蓮車

◇岐阜托鉢記……失名氏

◇愚學精舍……れんしや

◇柿の立木を柱に……松村白彦

一燈園・宣光社

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

謹告

一　本誌の殘本、第三號以下全部、多少づゝありますから御希望の方はどうぞ御申越し下さい。

一　讀者諸兄姉にして御住所變更の際は是非御通知願ひます。

一　集金郵便は郵便局の極遠い處の方の外は、他に餘儀ない事情のない限り、成るべくお避け願ひ度うございます。

一　御送金は成る可く振替をお使ひ下さい。又普通の爲替の場合は書留にして頂きたうございます。

一　御前納くださつた誌代が切れた時には、その旨申上げますが、猶御送金のない場合は、甚だ勝手ですが、集金郵便を差し上げることにいたしますから、豫めお許しを乞うておきます。

一　本誌は、現在、四千部刷らせてもらつてゐます。基礎を堅める爲に、許されるなら、あと千名の讀者諸兄姉を恵まれたいのです。もし本誌のやうなものでも幾分か道のお役に立つと思召しの方はどうぞ御知合ひに本誌を御紹介くださるやうお願ひ申上げます。

一　全國各地に於ける『光の友』の機關誌として、本誌をお使ひ願はうと存じますので、どうぞ御動靜を
　東京、市外上戸塚五八〇五光社内松下吉衛宛
に御通知類はしたう御座います。

京都市柳馬場三條下ル

宣光社

振替大阪五九八三九

往還二相

西田天香

けふは、私は、少し初心な方には、御迷惑かと思ひますけれども、一燈園の生活を少しやりしめた方に對して、主にきいて貰ふつもりで、私の行きつ戻りつしてゐる内容を少し聞いて貰はうと思ひます。人の數は少くてもさういふ方々がお見えになつてゐますから多少共鳴する處があらうと思ひます。一口に申しますと、元日を迎へてから今日まで、年賀狀一本書かずにをりますのも今おはなしさせてもらふ事をねつてゐる爲めであります。實は今日まではつきりしてゐるのですけれどそれがいざとなると行きつ戻りつするのです。幾度考へてもちやんと落ちつく先はわかつてゐて、それが實際の問題に打つかるとどこからかわからんやうになる、これは私が弱いのです。どこで喰ひ止めればよいか、よくわかつてゐて行けないのです。これは皆さんにもきつとあると思ひます。昨今お出でになつた方とて同じであると思ひます。やりしめた方もさてはつきりとしない感じがきつとするに違ひない。此正體を何の餘地なく見究めて了つて、少しも胡魔化されないやうに環境に奪はれないやうにといふ事を念じて、積んだり崩したりしてゐます。爲めに皆樣に御返事しなければならないことや、こちらから申出て行かなければならない事がおくれ勝となつてゐます、濟まないことじやと思ふてゐます。さう云ふ内容を今晩は聞いて貰ひます。

どこから一體混雜するかこれを往還二相といふ事からお話を進めたいと思ひます。

私等の要求は種々ありますけれど、大別して二つになります。一つは自分が悟れるか、一つは如何したら人を落ちついてもらへるかとのかう二つです。『落ちつきたい』『人を落ちつかせたい』の此二つです。佛樣の方へ往いて落ちつくのと

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

感謝報恩のために自分を中心にして來る人にそのきもちを分ける態度です。往還二相――この二つの要求は、此生活に立つたものは、意識するこせぬに拘らず何人も持たないものはない。此二つは本來は一つです。何故一つかこいふここ、これは少しむづかしい云ひ方ですけれご、一體『我』こいふものはこの少さい身體ではないのです。さう普通思ふてます。けれご小さいこれが『我』であつては落ちつく筈はない。小さいからだを離れて無始無終の全體が『我』であるこいふここになつた時に初めて落ちつくのです。『我こは何ぞや』こ云ふ事は、むづかしう云ひ出せば、はてしなく研究されて行くけれごも、私は思ひます、若しこの全體が我こいふ事でありますこ、そして達觀しますこもうその儘成佛してゐるのです。お釋迦樣が「山河大地悉皆成佛」こ云はしやつた。お日樣は東から西へ、水は高い處から低い處へ、山は靜かに、風は動いてゐながら悉皆成佛してゐます。たこへそこに物こ物こ觸れあつても、人こ人こ爭つても、世界中が大動亂しても、そのこごそれ自身は、見やうによつてはやはり成佛してゐます。我こかいふ小さいものから考へたり、生きるこか、死ぬこか、克つこか負けるこかいふ差別のみで見ますこ、そりや戰はよくないものであり天變地妖は忌まはしいものでありますけれご、さういふ考が無かつたら、木の葉が散るのも、さう變つた事でない。南泉が猫の首を斬つても、殺生にならない事もあり得るのです。併しながら、それは全く悟の世界で、その全體の中に、あつてはならないものであるけれご、そこに多くの迷や、煩惱所作があります。さうして多くの人は、勝手にそれを作つてそれにこらはれて苦勞して居ります。そこで本來は其儘成佛してゐるのですけれごも、成佛してゐるなりを迷ふてゐる迷ひ心がありますので、それに對して、當然の理由こして慈悲の心が表はれて出ます。出す方の者も自性はないのですけれご出るのです。昔の人は慈悲の心を無緣の慈悲こ申します。緣の無い處から表はれた慈悲こでもいふのでせうか、こにかく「わしが慈悲心を起したこいふのでは無うて迷の心からの要求でおのづから無自性の慈悲が湧いて出ます。若し迷が無ければ、慈悲がないのです。衆生か無ければ、佛が無いのこ同じやうに、往いて佛樣に敎はれるのを、報恩の爲に還つて人に分つのは其出處は一つであつて、何

も變りはない。併しながら表はれて出ます樣子は、やはり往還と二つに見えます。そこで一つの自分が、此生涯に立つて二つの働きをどうしてもせなけりや落ちつかないとして、さて其二つの表はれを一つのからだでします時に、非常にやりにくいことが起つてきます。遣りにくうてもやらねばならぬからして、とつおいつ云はず語らず、皆は悶えてゐると思ひます。勿論、その悶えはあらかた見當がついたる悶えであつて、悶える故に前の生涯に歸るわけにゆかないのであるが、此生涯をやりきらうとするものには、おそらく、積んだり崩したり、ひとり家庭の問題ばかりで無うて、或は光のつれをか丶へてゐる人でも、それは皆同じことです。私は一昨日の晩、ある人に斯ういふことを云ひました。

あちら向いて往つてゐる人がある。後からその人を呼びかへす。さうしてその人に教を乞ふとする。乞はれた人は『私はあちらを向いて往つて居ります』と答へる然かもその時訊ねた人は『い丶え、あなたは此方向いてるではないですか』と云ひます。これは錯覺ではないでせうかといふたのでした。その人にさうですと答へました。訊ねた人は『あなたは此方向いてるではないですか』といふのは彼方向いてる人を手前が此方向けたのです。手前が向けておいて『あなたは此方向いてるではないですか』といふのはその人の錯覺なのです。これだけの前提のもとに隨分あらゆることに應用することができると思ひます。假令へば一燈園生活ばかりを皆樣がなさる。さうして路頭で假に六萬行願をなさる人があると多くのものは、この單位の徹底振りにひきづられて行きます。併しながら今遽かに多くの人にそれができない時に、それは好いかも知れんけれど、皆が出來んからしかたがないと非難します。もつと實際の事に役にた丶なければ困るでないかと云ひます。その註文に對して道の者は尤もじやと思ひます。又尤もなのです。からしてその一行にやつてるものもこれだけではいかんのかと思ふ。さうして呼ばれたかと思ふて後をふりかへり、後戻りをし、もつと手近なことで、その人の喜びさうな事で托鉢し、一生懸命に捧げて世話してあげる。さうするとその人は手近な處で、安價に喜んで了つて手前が少しも進まうとしない。都合の好い處だけ利用して手前の落つけない處を、本當に落つかうと努力しない。さうして新しい生涯者の別に大した變りのない事を見て、こんな事が新生活かと價値を見誤ります。さうして自分もその位の事では本當の落つきが出るものではないほどの行詰りと迷とを持つてゐます。そこで又呼ばれて、立ち歸つた人も思ひます、こんな事

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

して新生涯の價値がどこにあるかといふ事を。こんな事をやつてゐる位なら手前もやはり落つかないし、一切の人もやはり落つかない。そこで路頭の人になりたい、或は遍路になりたい、或は六萬行願をしたいといふやうな心持が起る。これは往還二相の往還の二つの態度に對して適當な體度を鮮かに與へる事が出來ない爲なのです。片一方だけでは行かない。どうしても二つの方法が要る。けれどもこれをあざやかに扱はないと、求める方も、求められる方も、ともに光を消して了ふものです。どうしたら一つの身體で往還二相の二つが鮮やかに出てくるといふ事を云はず語らず祈つてござるに違いない。私もその一人です。かうやればはつきりすると思うてゐながら實際問題になると隨分ぼんやりする。そこで皆さんと私がそれに悶えるだけでなくて昔からあらゆる開山達やら人天の師匠達が隨分苦勞されたあとが歴然と見えます。一燈園生活に對しても或人は聖者文化と評したり或は又さうでないと云うたり眞俗二諦であると云うたり、又出家の姿であるといふたりして居ります。色々に見えるのは尤もじやと思ひます。その二つがこの生活の中に織り込まれてあつてそれがまだ事實の上に鮮かに具體化されないで居りますから他の人から疑問にされるのは無理はない。今も一人此處へ歸へりしなに親が迎ひにこられて福岡の人が一人歸られた、母親の病氣の爲めであるさうです。然したゞそれ丈けではない、園の生活してござる方のそれ〴〵の家庭でもこの生活者が或は世捨人のやうに見えたり或は又ひよつとしたら自分の家庭を都合よく整へてくれる人のやうに見えたりしてゐる筈です。どうかこれをやつてる者もやらせてる家庭も安心してやれるやうになりたいのです。私の信ずる處によりますと屹度よい筈なのです。今でも現に初めは心配したがお蔭で家まで變りましたと云ふ人もあるのですから、あたりまへの生活でゆき詰つてゐます以上、この生活をして行きましたら屹度さわりのないものになるには相違ないのです。何といふても大問題ですから、まだ鮮かに具體化しませんが、どうかやつてる者も、やらせてる者も皆さんと一緒にやるやうにしたい、その方法を正月から色々考へてゐます。どなたに顔を合せましても私は義務を感じます。どうするのじや、どうするのじやとせつかれてゐるやうな氣がしてゐます。その方ではもう何と云つても往かねばならぬし、往くべきだし、意義ある事は知つてゝ下さる、さうしてこれは此世に生れて來た人間として一番深い往き方であると同時に世界大の問題であるといふ事も知つてござる。昔からの教祖達が色々やり殘された事など比較

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

研究して何やら取り殘されたる事を、今こゝで鮮かにするのだらうと感じてござると思ひます。一方には精神的に解決せねばならぬと云ふ人達と一方には又物質的に改造せねばならぬといふ人達との間に立つて、その二つを兼ねて、又その二つの短所をぬいて　こゝに不二門のお光が現れるのだらうと云ふ事も知つてゝ下さる。複雜な世の中から逃れるのでもなし、今の皆がやつてるのと同じ事に落ちるのでもなし、出家でなく在家でなし、此處に不離不即のお光の生活化したものが極めて手近な歩み方によつて現はれるのだらうとも思つてゝ下さる。さうしてそれはどういふ行き方だらうといふ事を皆心待ちにしてゐるのです。どうせ一時にはつきりとするものでないけれども今年はできる丈けこれをはつきりとしたい。さうして志を同じうして行く方と結束して立つて見たい、勿論無理に結束する事は要らぬ、結束してやる事が自他共に必要であると思ふ者のみが結束したい。釋尊が祇園精舍で道を廣められかけた時にも、色々の役廻りが要つたときゝます。僧堂がたつてゆくのも無くてならぬ役目が五つ六つあります。一つの生活が澤山の人と交渉が起つて團體となつてその團體がたつてゆきますのは、それ〲の受持の役廻りの人が、その本體は一つであつて、それ〲その持ち分れた仕事を同じ呼吸でやります時に能率が上ります。勿論それは形だけの事ではない、精神的にも深味へゆけます。一つの體では二つの事はでけん少數の人では多數の方面を滿足さすわけにはゆかぬ。一人の人の周圍には種々の根氣の人が幾人もあります。その人達を滿足させて、誤らぬ方面へ導かうとするには又それ丈けの方便が要ります。お光の本據を忘れないで多々益々辨じるやうになりますと、それ〲の人が云はず語らず背負つてゐます義務はいつの間にやら果されてその九族まで浮み上つて次第々々にこの生活が延びて行つて、やつた人がやりがひがあり、やつて貰うた家庭がみな喜ぶ事と思ひます。要するに、心の一つになつたお光の連れが、根本から信じあつて力になり合つて行きます時に、お互のもや〳〵してる問題も鮮かになつてゆくと思ふのです。

さうした事を考へたり考へ來りしましてこゝに根本に於て一つの役廻りをはつきりしたいと思ひます。それは『明神さんの役』と、かう申しておきませう。昔から外護の明神と申します。道これ自身は守つて貰はいでもやつてゆけますけれども、道について來やうとする人々はこの明神がある時都合がよいのです。これは此方から頼むのではない、あちらから

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

頼むのです、どうか外護をさして貰ひたいと。するこゝちらからもおがみます、まこゝに奇特な事であると。これがちよつとした事じやが仲々六ケしい、一例を擧げて申しますれば、此家（一燈園を指す）を何處かへ移したい『どうか』と頼むのはそれは間違ひなのです。十字街道が本坐なのです、家は無くてよい。けれどもこの家がある爲めそこまで泳ぎ着ける人もあります、さういふ人達は他の外護の人達によつて守られてくるのです。もし此處に人があつて『私達の中から脚の弱い者がゆきますのにどうかこれを用ゐて下さい』と云うてこれを建てれば障りが無いのです。托鉢してる人が『どうか何々を下さい』と云ふのは弱いです『何々を使つて下さい』といわれてそれを拝んで使うのは强い。昔からその呼吸を一息ひき損う爲めにあつたら立派な道を、金の爲めに蹂躪されたり、有産階級のおもちやになつたりする事が澤山ありま す。さうあつてはならぬ、頂かないと云ふ事を、はつきり生活に現はしてゆきます事を、何處までも權威あらしめて、そうして又そこへ泳ぎつかうとする人やら、或はその一人者の爲めに傍へついてくるかよわい優しい人達を澤山にその傘の下に集めてみなそれ〴〵本當の生活へ歩む事が出來、又この托鉢者が托鉢する外に必要な敎養をなし得るやうな機關ができてゆくには明神さんが必要です。昔から外護の明神といふ事を隨分きいて居りましたがさういふ意味において現はれて來なければならないものです。一燈園の周圍には澤山現はれてゐます。さういふ人が本當の明神さんとなるか、一燈園生活がひよんなものになるかは園の生活者の覺悟にある事です。離れ過ぎれば菩薩行にならないし、近より過ぎればお光が消えるのです。この呼吸がむつかしい、祈るより他ない、祈つて〳〵下坐して〳〵、出來る丈け隙のないやうにしてゆかねばならぬ。こんな事を思うと私もほうつとして了ふけれども、私は私丈けの事はしてゆかねばならぬ、皆樣も皆樣だけの事はして行つて下さい。餘り遠からぬ中に考への決つた事を一つやつてゆきます。私の體も惰性がついてきてはがゆいと思ふ事もございます。皆さまの若い元氣を借らねばならぬと思ひます。私は私丈けやつて行きます。皆樣ついてくる方は共にやらせて貰ひます。皆樣もどかしいと考へて居られたと思ひますがありのまゝを申し上げて今晩は終ります。

（大正十二年一月廿七日、一燈園に於ける講話　松井晟學筆記）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

一燈園小話

西田天香

生きるためには死なねばならぬ

死ぬことの好きな人があらうとは思ひませぬのに、ほんとうに生きやうと思へば一ぺん死なねばならぬと云ふことを、私は時々申します。云ふたあとで無責任な感じをしたり、ことを強めすぎた氣持ちをしたり致しますが、矢張りまたその言葉を繰り返します。

「我」と云ふものはあざやかなものでありながら、考へ出すと正體の解らぬものであります。「我」とは何ぞやと云ふ語は昔から多くの人人がうるさがつてをると申します。物と心とは一つであつて同時に二つに現はれてゐます。考へなければ一つでありますけれど、考へ出したらもう二つになりたがります。

勿論大死一番と云ふその死の字はその二つにあつかひましたうちの心的我であつてこの肉身を殺すことでないのでありますが、心的我だけ殺したあとの身體と云ふものは、その許された魂とともにしつくり一つに顯現しました外に永遠に生きたものであるやうです。むづかしう申せば父母處生身即證大覺位などと眞言では申します。それと一つであります。

一遍死ぬことは生きることであつて、たとへちよつとでもその消息を摑まへてその通りになれない前の習慣性をそれによつて引きづられて行く時に、それは園の生活を歩む態度であります。人間の考へで思ひ計ることの生活をしないで、その時その時の報恩奉仕のことを樂む生活が世間の人から馬鹿に危げに見られますが、私の二十箇年の經驗ではその方こそ大丈夫であつて、あゝとかかうとか計りすぎる生活こそ不安定なものであることをつく〴〵思ひあはされます。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

此の頃のやうに經濟上の動搖が激しい時は一層この感じを强うします。やれ銀行が戸を閉めた何十年汗水垂らして貯めた金の通帳が反古同樣になつては堪つたものでない。某はたゞ銀行が休業したと云ふだけのことを店先へ來た客人から聞いて、その生命の樣に賴んだ九千圓とかの預金がとれぬと思ひつめて、ううんと叫つて即死した人まであると聞いては、計畫と云ふものは如何にも果敢無いものであることを證明します。計畫せない感謝の奉仕生活がこれと反對に如何にも大盤石のやうであつたことの一つの事實を話して見ませう。

私は前に一軒のお茶屋へ遊びに行きました。そのときでも唯極樂とんぼで遊んだのでは無うて色々の行き詰まりを考へながら氣を紛らせてゐたのです。勿論ケチな遊び方でしたでせう。然し少しも無理を言はないので歸りがけに鹽を撒かれるやうなことも無かつたかと思ひます。遊び目に浮いた金を出すことはせぬかはり、其處の飯炊き婆さんに善光寺詣での月掛講にまじらせて其のお金を出させて貰ひました。私がこんな生涯になつた前に賴母子は滿ちて婆さんは善光寺へ參られたのです。僅かの金で非常に悅ばれました。こんな生涯になつてから其處の家へ托鉢に行きました。何を隱さう十圓足らずの未拂ひ金がそのお茶屋にあつたのです。その位の金が拂へぬのではないけれども、借りがあつても這入れるものだと云ふことを證明したい爲に借の代りに托鉢奉仕に行つたのです。昨日のお客が今日の男衆――とてもお茶屋は信じませぬ「御冗談おつしやい」の一言で幾度か擊退されましたが、夜中に人知れずそこの表を一週間箒目正しう掃いたことからたう〳〵お茶屋が根負して私の奉仕を聞いて呉れました。三時半頃とぼ〳〵と箒を一本持つて圓山公園からそこまで出掛けて行つたことに就いて面白い話が大分ありますが、それは拔きに致しまして、兎に角其處の家へよく托鉢奉仕に行つたものです。一番そこで私を信じますのは無論飯炊の婆さんでした。私も亦親しい氣持ちで肩を揉んだり用を足したりして居ました。

或時その婆さんが申しました、「私も一燈園生活に入りたいけれども病氣の時には此處の家で厄介にはなれぬ。お金でも澤山と貯めて小さい家に田舍の子供でも相續人に來て貰うてゞもおかねばならん。するとやつぱりお金が要りますなあ。」

「それはさうかも知れんが、そんな先きの心配より今慾張らずにその場所から人のために捧げるのです。病氣をして世話

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

のして呉れ手が無かつたらそれまでのこと、先のことは佛さま任せ」と云うてから〱と笑ひながら婆さんの肩をもんで居りました。婆さんが頻に考へ込みまして、今度は一段思ひ入つた風に

「若し惡かつたら一燈園で養生させて呉れますか」

「よろしい引受ける。若しもあんたが奉仕の氣持でこれからこゝの御用を勤めるなら………」

「まあそんならその氣持でやりますえーな」

此麽話をしたこともあつた。婆さんを見るたびに、若し病氣でもしたら一燈園は放つて置けぬと、人知れず思うて居ました。婆さんは一燈園にはなか〱親切でした。古綿を念佛しながら拶りほごいて古い布にふつくら入れて、私の夜具にと贈つてもくれた「やれ泊れ」「やれ握り飯を持つて行けと」臺所の取締だけにその家を代表して好い氣持を運んだものです。

何年か經つて、或る時、私が下京の鐘紡に居たらチリン〱と電話が掛つて、その婆さんの急病で死んだことを知らせて來た。取るものも取り敢ず走つて行つたら、今朝掃除をしながら病みついて、三十分經たぬ間にたいして苦しみもせず目出度く往生したとのこと。歳も相當であつたし、死ぬまぎはまで欲げなしに働いた、一燈園好きの婆さんを見ては、心から拜まぬ譯には行かなんだ。

勿論この婆さんは永い間の奉公人であつて、此界猥でかうした人の跡始末は、たいがいは小さな借家に小さな世帶を持つものです。親類の子供などを相續人として居るので、遺骸は其處へ運んで主家と身寄りの者が葬式をするのです。狹い室でお茶でも入れて、御詠歌位うたうてこそ〱と葬ひしますか、又は遠い國元へお骨を送つて永い間住みなれた場所とかけ離れて淋しい墓場に眠るものです。

處がこの婆さんは引き取る家が用意してない。そこの家を死ぬまでの奉仕の場所としてをつた。奉公人根性でなうて、家のものゝやうであつた、遺骸を圍んで葬式のことが相談された。誰云ふとなく家から葬式を出してあげたらと云ふことになつて、一人の反對もなかつた。ある可き筈でないことが、何の障りもなく通過して云はゞ國葬になつたのです。

こゝに面白いことがある。其處の主人の先代が金にあかして、死道具の用意をした。枕屛風には紺紙金泥で二十五菩薩

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

の來迎の圖を描かせ、棺掛けは本金の好きな好み棺臺はかく〳〵前卓はこれ〳〵と數寄を凝らして造つてあつた。燈籠から花立から扨ては會衆への供養の器まで、死晴れの衣裝とゝもに遺憾なき計畫が成就されてあつた。

處が一朝傳染病に冒されて病院の隔離室に收容され、相當ながく患うてとう〳〵死んでしもうたのです。傳染病のために死骸は規則に依つて繃帶され、我家へ持つて歸れずに病院から火葬場へ送られて來迎の屏風も棺臺も棺掛けも一つも、その人の役に立たなんだ。それが其儘持ちになつて居たのです。一燈園好きの婆さんの死んだのはそれからたしか三年目であつた。

彌々所謂園葬と決まつて扨思ひ出したのは、その凡ての道具であつた。先代が思ひを凝らして造つておいたものが、そつくり此婆さんの爲めに用ふることになつた。皆が口を揃へて云ふた、その道具を出しながら。「何故に先代はこれが使へなんだのか知ら。折角樂んで拵へて居られたものを妙ですなあ。」屏風を引き廻しながら又多くの人は云ふた。「今度の佛は幸福ものやな、何の用意もせないにこれがそつくり飾られるとは。」

私はたとひ三年患はれても園で世話する筈であつたのが、一時も世話せいでこのやうにまでして、此處から叮嚀に葬られるかと思ふときに、お光の攝埋の不思議を讃へたことであります。其麼結果になつたからそれが仕合せぢやと云ふのではない、當てにしたことがいつも日をそこへ捧げた爲めであります。考へて見ると婆さんが自分の爲めを思はずに其日其當てにならずに、當てにせいでも妙なことになるものぢやと思ふたのです。

捨てることは拾ふことです。死ぬことは生きることです。勝手な考へを捨て、我を殺しその時その時をお光の前に捧げて働くときに、それが其處で、生き甦つて居るのです。明日のことを思ひ煩らう勿れ、道端で死んでも屍は獨り葬式してくれます。又この婆さんのやうな當てにもせんことが轉がり込んで多くの人の羨望になることもある。當てにすることは外れる。銀行の休業で家の經濟が暗になるやうな事よりは主家まかせのこの婆さんが明るい暮らしをして居ました。

今からもう七年も前のことでしたが、一燈園の過去帳にも俗名いま六十何歳と書いてあります。お茶屋は祇園一流の家、名はお預りにして置きます。正月早々から死ぬ話、緣起が惡いやうだが、死ぬことを明かにするのは不吉でもないでせう。

一つの申出で

——光の友諸兄姉に對し——

松下吉衛

この申出でが一人でも多くの方にきかれますやう、一人でも多くの方がこの申出での具體化に御助力御參加くださいますやう、神かけておいのり申上げます。また、もしこれから述べさせてもらふところに誤りがありますなら、何人かの篤き志によつて批正していたゞけるやうお導きください。

この申出では、私には一生けん命ないのりです。現代社會の實相と一燈園の現狀とは、ふつゝかな私をも驅つてこの申出でを餘儀なくさせました。

『申出で』などと改めて言ひますと、何事かと耳をそばだてなさる方がおありでせうが、實はきはめての平凡事で『光の友、團結せよ！』この叫びに外ならないのであります。

内面から觀て、一燈園の現狀は、今、同人互に團結を堅うするの時機に達してをり、外面から察して、社會は一燈園の組織化を痛切に要求してをると、私には信ぜられてなりません。

ある人はかう言はれます、『宗教は個人の心靈を取扱ふものである。團結、組織などいふ必要がいづこにあるか？』と。これはこのまゝに眞理として受容れられる時と場合とがあることゝ思はれますが、下根の身の貧しい體驗と聊かの社會的智見とは、止みがたい祈りとして、今『團結』を叫ばせます。宗教生活の組織化が生命の躍動を阻み、その結果、光は消され人心は誤られ、正視するに堪へない徒らに尨大な殘骸のみを横たへてゐる悲慘な實例を目のあたりにしながらも、尙、私はこの『申出で』を諸兄姉にきいていたゞきたい念願を禁ずることができないのです。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

前方、五人か七人かの熱心な求道者しか在園して居なかつた時代の一燈園には、團結の組織のといふ殊更な要求はなくとも、そのまゝ自然に團結もし適當な組織も形づくられて居たのでありますが、今日では、京都だけでも百數十人もの在園者が居り、いくらお斷りしても入園希望者が後から〳〵とお見えになるといふ狀態であり、又、全國各地には計るべからざる多衆の光の友が居られ、それ〴〵の立場から、形こそ違へ、皆『光』へのいのりに歸一しつゝあることを考へ合はすなら、このまゝ成行に放任して置くことは、道に對して恐れ多いことさへ感ぜられてなりません。

それは、私ごときが賢しらにこのやうなことを申出でずとも、天香さんのお胸には何もかも用意ずみになつておありのことゝ想像するにがたくはありませんが、何をいうても餘りにお忙しすぎるお體でありますから、この團結乃至組織化のことは、私等の手で上行運動の行き方を採らせてもらふ外はあるまいと考へられます。

先づ京都の一燈園の組織について卑見を述べさせてもらひませう。

同人　『光明祈願』に參じ、托鉢修行半年乃至一年の後、評席會の推擧を受けたもの。

同人推擧式は簡潔莊嚴に營まれること。

評席　同人ほゞ十人につき一人の割合に擧げ、園主の選任によるものと同人の推擧によるものと各々半數づゝにする。同人をほゞ二十人づゝ寮別とし、（但し必ずしも建物を別にするを要しない。）各寮に評席一人乃至二人を配する。評席は寮員の托鉢修行につき他の評席と協力し身を以て率ゆべきこと。（托鉢先の按排、適所に適材をつけることも、かくて、可能とならう。）任期二年。

評席會　園萬端の協議機關。當番が議長。議事は多數決、贊否相半するときは議長がきめる。決議事項が有効となるには園主の同意を必要とする。園主、相談役はなるべく評席會に出席すること。

例會は毎月一回一日。但し必要に應じて臨時會を開くことも出來る。

會計　評席會の推擧による。同人への供養は總べて會計が扱ふ。會計報告は月々評席會の席上でなされねばならぬ。任期一年。

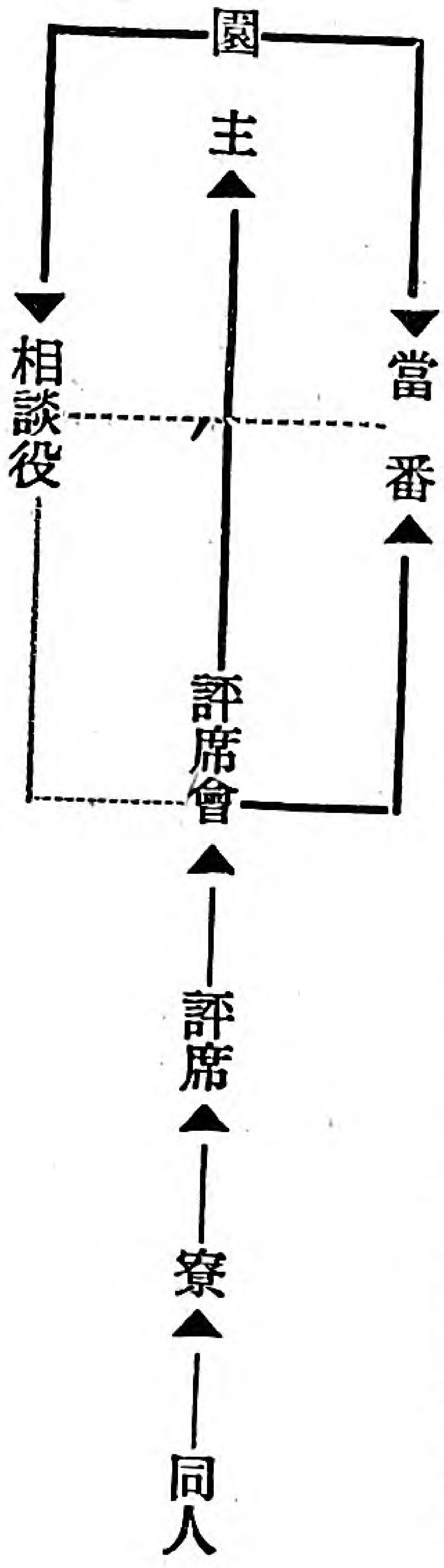
（序ながら、園の經濟について言はせて貰ひます。同人はそのなくて叶はぬものを評席を通じて求めることは許されますが、園としての一切の支出は評席會の協賛を得べきことを原則としなければなりません。たとひ緊急已むを得ない支出にあつても評席會の事後承諾を求むべきです。）

當番　評席會の推擧による。園主の意を體し、評席會の決議事項の執行に任じ、園内外の實務を司る。任期一年。必要に應じ、當番は輔佐を選任することが出來る。輔佐の任期も一年。

相談役　園主の推擧による。園主の相談に應じ、又評席會に出席して意見を述べることが出來る。

園主　評席會の推擧による。同人修行の師範であり、園の代表者である。（勿論、天香さんになつていたゞく。）園主の傍に執事局を設ける。執事は園主の選任により、園主の事務を助ける。任期は二年。（執事の中には文筆をよくする人を加へて、常に天香さんの左右に侍せしめ、その說話を細大もらさず書き綴つておくやうにしたい。）

前述した所を、便宜上、表にして見ればザツト次のやうな關係になりませう。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

求道者　一度、當番の手を經た上で、なるべく、一人々々園主に會つていたゞくこと。いふまでもなく、どんな求め方の人に對しても疎かな取扱へは許されません。

講演會　夜は纏つた連續講演を開きたい。課目は手始めとして經濟史、社會思想史、宗教史、道德史、哲學史、文學史等の中からえらんではどうでせう。かうした企ては決して『學愚の道場』の精神に悖るものではなく、もし適當に取扱はれるなら、寧ろ獨りよがりの增上慢をへし折り、卑しむべき陋見から人々を解放しさへすると信じます。

衞生のこと　百數十からの人が集團生活をして居れば幾人かの病者が不斷にあると見なければなりますまい。叶ふだけ衞生のことに注意し、その設備も許される範圍で全きを期したいと思ひます。（夜具類を日光に曝すこと、傳染性患者を隔離すること。）

宣光社（商事的）を經營して經濟規範の確立を遂げようとするなら、實現の可能性を最も多く備へた仕事が選ばるべきでせう。さしあたり出版業などはどうかと思ひます。

園主、當番などいふ方が、宣光社（商事的）に關與してその責任ある地位につくことは考へものではないでせうか。心にもなく他を誤り人を傷けること決して少くはありますまいから。

Y兄が陣頭に立たれてはいかゞでせう。

とにかく、どなたがなさるにしても、一燈園と商事的宣光社との間には、太い境界線がハツキリ引かれてないとうそのやうです。

この頃、一燈園について何のかのと流言蜚語が行はれますのは、法執から來てゐるもの、少し擡頭しかけるものがあると直ぐ引きずり下さうとする日本人の卑しい島國根性に由るもの等、種々の原因があることでせうが、その最も大なる一

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

つは、確に、已むを得ない事情からにせよ、天香さんが一燈園の園主であられるこ同時に商事的宣光社の責任者の地位におつきになつてゐられるこさだこ思はれます。『已むを得ない事情』は、親しい同人間だけには能く理解されてゐる筈ですから、別に問題にもなりませんですが、之を廣く世間一般から眺めますなら、二重人格的に誤解されるここは甚だありさうに想像されます。

何しろ、ご覽の如く、社會の經濟組織が切捨御免になつて居り、弱者の肉に向つてギョロ〳〵すごい眼を光らかせて居る人々に伍して不即不離にやつてのけるのが商事的宣光社の役割なのですから、積極的に他を『侵さない』鳩の如きやさしさ共に、消極的に他から『侵されない』蛇の如きさこしさがなければその事業が立ちませんので、ごうしても或る程度の身構へを餘儀なくされます。この身構へが問題にされるここになるのでせう。之を問題にする世間は前提を忘れてゐるのであつて、理に於いてはその間違ひを容易に指摘されても、今まで餘りに屢々欺かれすぎて來てゐますから、心の底からの承認を中々與へないでせう。つまりは、これが、道の障りになつて參ります。これは決して私ひこりの杞憂ではなからうこ信じます。

で、私は、天香さんに、この際、商事的宣光社からお體をお退きになられるやう、切望して措かないのであります。殊に一燈園關係だけでも御用は日一日こお增えになる一方で、こてもお一人ではお間に合ひ兼ねますし、ために御健康を損じはしまいかこ側から氣遣はれるほごですもの。

『光の友、團結せよ!』の要求は、また、必然に地方にも及ばなければなりません。

『光明祈願』に參じられる方を、ひこしく『光の友』の名をもつてお呼びしたい。『光の友』の居られるこころ、隨所に『光の友の會』の創設を見られたらごんなによいでせう。

光に於いて何人も一つでなければならない。
　人々よ、相結び相扶けよ！
『光の友の會』が一つ増えれば、オーアーシスが一つ新に發見されたわけです。天國がそれだけ地上に具現されたわけです。
　産れよ、『光の友の會』！
　殖えよ、『光の友の會』！
光の友が三人でもよい五人でもよい、乃至一人でもさまたげない、
光の友の居るところ、どこにでも『光の友の會』が産れよ！
日本國中、支那にも、インドにも、ロシアにも、フランスにも、またアメリカにも殖えよ！
世の中が、このまゝぢや、あんまりひどすぎる。
今は、全く、宗派などいつてゐる時でない、
イズムなど爭つてゐる場合でない、
人種などどうでもよいぢやないか？
光の友、團結せよ！

私は、かう、叫ばずには居られません。
扨て『光の友の會』の申合せを假りに書かせて貰ひませう。
一、名稱　何々（地名を冠しては如何）光の友の會。
一、會員　『光明祈願』に參ずるもの。
一、事務所　何々に置く。
一、世話人　若干名を置く。
一、行持　毎月第一日曜（例へば）を托鉢日とし修行を專にすること。即ち當日會員は事務所に集り靜座讀經の後それ〴〵

托鉢に出掛ける、夜も成るべくなら一所に會し懇談をしあふやうにする。托鉢の仕事は固より定限されないが、人のやりたがらぬ必要なことをかくれてすることに中心を置くこと。

一、清規　常に敬虔の心を持し人類愛の理想に生きること。義務を盡すに勇猛なること。我が爲めに爭はないこと。むさぼらないこと。衞生、勞働、研學、修業、一日も等閑にしないこと。

（これは毎朝讀むやうにしたい。）

一、講究會　毎月第三日曜（例へば）に開く。年に何回か一燈園その他から講師を招ぐこともおもしろいでせう。

一、機關誌　現在の『光』誌をこの目的に併用したい。各地の『光の友の會』の狀況が月々『光』誌上に報ぜられるやうになれば隨分い丶と思ふ。

全國の『光の友の會』が互に相結ばるためには、毎年一回、京都、東京、その他で『光の友全國大會』を開催する必要もありませう。但し、これが、淺薄な宣傳運動や生命のない儀式に墮しては大變ですから、この點はよく〱注意しなければなりません。

天香さんの講演、同人方の托鉢の旅も、この『光の友の會』の手を經て行はれるやうになると、非常に好都合だと思ひます。

全國を通ずれば、今、『光の友』の名をもつて呼ばせてもらへる方々が、恐らく何千何萬の數にのぼつてゐることでせう。これをこのま丶にしておくことはすまないと思ひます。『宗敎は個人の心靈の問題であるから、側から騷ぎ立てたとて何にもなるものでない。』との意見も屢々耳にするところですが、その『個人』といふものが、實は、通常考へられてゐるよりモツト〱社會的存在なのであつて、普通人にあつては、殆んど決定的に『居は心を移す』ものでありますから、生活環境の調整が光化運動の一切事であると、言つて言へないこともありますまい。

『光の友、團結せよ！』の提唱は、この生活環境調整の一つの行き方に外ならないのであります。

ほんとうに彼の火宅にも喩へられる生活苦の渦中に、たゞ一人おかれたのでは、誰とてたまつたものではありますまい。すぐれて强大な意力の所有者なら知らないこと、私共凡愚の身にあつては、折角萠え出た菩提心の若芽も、接する人もく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

荒んだ心であつて此等を相手に日となく夜となく生活戰を餘儀なくさせられるのであつては、到底健かな成長を望むわけにはいきますまい。それが、もし、私共に『光に於いて一つである友』が、わが住む土地に幾人或は幾十人あり、之を全國にすれば全世界にとれば幾百幾千萬の數にのぼつてゐることが知られ、更に一ヶ月の中たとひ一日たりとも友と共に托鉢を親しく體驗することが出來るなら、弱い意志も結ばれることによつて強く、一人ぼつちであつても光の連なりに於いて寂しからず、菩提心の若芽もやがて根を据ゑ枝を張り、やがてまた花咲き果實るにいたりませう。

現在、日本に、私等の靈を奪ひ取らずにおかぬホンモノの顯現は、いづこに探ね得られませう？　S園か？　幹部の方も隨分熱心であり、全國を通じて幾萬といふ團員がをり、多くの知名の士も參加して、可なり盛んな勢を示して居りますが、これまでのところ、概して實踐倫理運動の範圍に限られてをるやうに見受けられます。勿論、結構なことに違ひありませんが、社會組織の根本問題を考へ、また、あゝした行き方で碎かれた靈がどれだけほんとうに甦り得るかを思ふと、失禮な言ひ草かは知れませんが、一種物足りない感じがするのです。安價な感激だけでは世の中はどうともなりますまい。○○○○的結社で將來キット何か仕事をするだらうと思はれるのはU社ですが、若しその標榜するところに政策的意味が含んでゐないとすれば、餘りに帝國主義的色彩の強すぎる嫌ひがありはしないでせうか？

最近、愈々その輪廓がハッキリ現はされて來たA氏の妥協を許さない生活態度や、學者的良心の結晶ともいふべきK氏の思想には、何人も畏敬の念なしに對することを得ないでせうが、この人達は特に惠まれた人、選まれた人であつて、世間一般の普通人に、かうした生活態度なり思想なりをそのまゝ移し植ゑようとしても、それは無理な相談でせう。

M氏の試みも西洋に於いては既に百年も前から種々の人々によつて屢々行はれてきたことであり、沙漠の中のオーアシスの一種として充分な存在理由をもつては居りますけれど、あれだけで、人生と社會とのことがうまくいくだらうとは想像されません。

たゞ、クリスト教信者であり神の道を生きながら、同時に、勞働運動に參じ一方の急先鋒として働いてゐられるT氏の生活は、私等にある強い暗示を投げてゐるやうに思はれます。

然らば一燈園は如何？

一燈園とは、實は無名の名で、暫定の符牒にすぎません。あの『光明祈願』――これとても亦もとより暫定です。――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

の一節にも記されてあるやうに、『別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ徳を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期』して居るのでありますから、眞宗信徒はその信心なりに、日蓮主義者はその自力の行き方なりに、クリスト教徒は聖書の教義をそのまゝに、神道の方はかんながらの精神を生かすやう、金光教、大本教、天理教などいふ新宗教は、やはり各々その立場々々を失ふことなしに、又既成宗教によられない方はその何にも持たぬまゝに、いらしつて一向差支へないのです。

けれど、唯、一事の務むべきものがあります。

それは、生活にまで徹して眞道を行ぜんとすることこれです。心や身を調へるばかりでなしに、生活そのものを如法にする行き方をとることです。釋尊に還りクリストに倣ひ、その他祖師開山聖者達の行履を如實に學習する態度に出づることです。言ひ換へれば、淨財化されたものに食む生き方をとることです。

かういへば或は難ずるものがあるかも知れません、『淨財に食むなど、言つても、お互凡愚の身で果してどれ程の事が出來よう？やはり凡愚は凡愚らしく生きるのが反つて正直である。僞聖は醜い。』と。

さうです、筆者も『僞聖』を醜しとするの情に於いて決して人後におちたくありませんが、聖者を學ぶことゝ、聖者を裝ふことゝは、カッキリ差別されねばなりません。一燈園の托鉢者の中に、時に或は聖者を裝ふ者もないではありますまいが、これはその人の個人的薫習と見做すべきもの、一燈園本來の立場は『學ぶ』態度にあることといふまでもありません。

すでに『學ぶ』態度をとる以上には、それが空想にならない限り出來るだけ完全なものに標準をおくことも非難さるべきではありますまい。又『凡愚は凡愚らしく生きる』とは、現下の生活に矛盾を感じながら之に安んずるといふ生き方ではあるまじく、眞に凡愚たる自覺ある者ならば、その人は、必ず、すなほに『學ぶ』態度をとる筈でありませう。似而非なる眞宗信者が『このまゝのおすくひ』を振りかざして、したいざんまいをはたらけばとて、この故に親鸞、法然のかの虔しやかな行ひすまし方を『僞聖』呼ばはりするものはありますまい。

一燈園は聖者を學ぶべきです。自身『我が身はいたづらものなり。』『我は囚はれ人なり。』と告白され、眞に凡愚たる自覺をもつて歩まれた大人の聖い行履を學すべきです。

この一事は、一燈園の過去二十星霜の歴史において、貴い犧牲の血を流しつゝも、天香さんを中心として、よしまがりなりにも、行じ貫いて來てをり、又この一事こそは、萬世不易の眞生活法であると確信されますが、今や、社會には、『組織惡』といふ爛熟しきつた毒性の腫物から惡血が滲み出てゐて、人を害ひ、世を毒しつゝありますから、『世界の眞平和を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

將ち來たす』ことを大願の一つに數へてゐる一燈園としては、膏藥ばりの姑息な療法でなしに、直ちに病根に向つて爬羅抉剔のメスを刺す外科手術に出でねばなりますまい。

この方は一燈園としてまだハツキリ具體化の運びになつてをりませんが、之をどう取扱ふか、その取扱へ方いかんによつては社會の崩壞さへ結果する危險のあるこの致命的疾患を治療し得るかどうかゞ、一燈園の現代に於ける社會的價値を決定的にきめることになりませう。

前に述べた如く、『組織惡』根絶のいのりに立つてゐる思想乃至運動の見るべきものが、現在の日本には、餘りに乏しすぎます。新人を以て自ら許す智識階級者の多くも、生活の實際においては、喩ひ不本意にもせよ、ブルジョアの營利を助け、已れ自身亦ブルジョア氣分に浸つて消費經濟を營んでゐるのを見受けます。勞働者は比較的に純情であり、最も頼もしいことには充分な實行力を具へてをり、改造運動の主體たる運命は恐らくこの階級のものが擔はされてゐると信ずべき理由がありますが、憾むらくは、彼等は懺悔の念に缺けてをり、勢に驅られては徒らな犠牲の流血を意としない嫌ひのあることであります。こゝにこそ一燈園生活者が渾身の熱禱をこめるべき使命が見出だされはしまいか？

一燈園は、資本家たる人それ自身を憎むことは言ふまでもなく禁ぜられてあります。たゞ、私に有つ生活の人間に許されないといふ眞理はハツキリと宣べられねばならず、同人は自ら無所有の生活を實證すべきであります。有てる者をして更に有たしめ乏しき者よりあくまで奪はしめる資本主義制は、資本家それ自身に對しても、實は大なる禍でなければなりません。されば、組織の改革は、資本家それ自身のためにも差し迫つてきてゐる問題である筈です。

無抵抗主義とは、文字通りに解しても、惡に抵抗しないだけのことであつて、惡を承認し惡に媚び乃至惡に對し回避無關心的態度をとることではありますまい。一燈園に托鉢を行ぜんほどのものは、如何に口に甘くとも、驕慢なる資本家の殘飯ごときに目をくれてはなりません、それは惡を承認し、惡に媚びることになりますから。

一燈園のいのりが個人的にます／＼深められ、靈の本源にまで徹して神人交通の無相樂園に逍遙遊自在なるを得ると共に、社會的にいよ／＼廣く光の友の團結が堅められ、地上天國の創建上、最大の妨害原因たる組織惡の根絶に對つて、同心一體、渾身の熱禱がさゝげられる時、一燈園の存立は厳として大地と共に動くなきを得ませう。

而して、その深さは旣證の事實。今は、その廣さが問題として殘されてあります『光の友、團結せよ！』の提唱なきを得ない所以。

（一九二三、二、一七）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

光明へ

八田勝三

私は今『獨白』から『光明』へ躍進する。體驗が深まるにつれて、殆んど絕望に近い自分の醜さを見出しては、唯默々と御詫びし乍ら祈らせて頂く外ないが、

『斯くあれかし』

と願ふ事は許されても好いことゝ思ふ。衷心から湧き上る光明への祈願は、それ自身が貴いのであつて、祈る人に依つて評價さる可きものぢやないのだから。

壁に向つても『獨白』すると書いたこともあるが、それは餘り寂しすぎる。躓かれるのを怖れて、『獨白』としたのを、餘りに卑怯な云ひ逃れだつた。表現の不完全さに禍ひされる事を知り過ぎる位知りつゝ、叫ばずに居れない此の思ひを、この世につかはされた恐らく誰もが持つ必然性を帶びた祈りだからである。何は兎もあれ、稍退嬰的に墮した過去の態度を振り捨てゝ、『光明へ』の第一歩を踏み出さうと思ふ。

○

死に直面するや、

『卿等も我が幸福なりし如く、惠みの裡に暮し給へ』と兄弟姉妹に祝福を送りつゝ、永遠に歸らんことは、私達の最も望ましい願ひだ。

然るに瀕死の病人の口から『革命』を叫ばしめるとは何といふ悲しい事事であらう。悲憤の爲、鬢蓬々たる蒼白の頰邊に一抹の紅を漲らせ、最後の息が綴る、社會惡に對する痛ましい呪咀は、さながら地獄の聲である。その深刻さはあらゆる雄辯に勝つて居る。人の世に釋尊が生れ、キリストが遺はされた事が祝福さる可きと同時に、兄弟の一人をして、呪咀の裡に此の世を去らしめたことは、人類全體の恥辱ぢやなからうか？

さあれ現代は最早や考へて居る時機ぢやない。『思想は直ちに實生活にまで具體化されねばならない。』道草を食つて居るのは餘りに苦しい世相だ。

○

或る人『此頃は眠れません。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

きりと解る。之れが此岸より彼岸へ、穢土より淨土へ通達する白道であるとも信ぜられかけて來た。

時々は元の世界の愉樂の戀しくなることもある。もう一遍その世界の生活をして見たいやうな欲求も起る。そして、そんな時は可成り寂しくなることもある。

けれども、もう歸ることは出來ない。

元の世界と此方の世界との間に、屹然として聳立つてゐる國はとても再び越すことの出來ぬものである。亦、私としては、もうそれを越すといふ氣にはなれない。

白道の兩側には諸の難があり、懼れがありはするが、しかし、それに堪へることは出來る、立つてゐる白道には何の怛れも、危うさも存在しないから。而して、其處には慈悲の光が諸天善神と共に守護してゐる。

元の世界には、三惡四趣――地獄、餓鬼、畜生、修羅が充滿してゐる。

來るべき第二年には、私は何處を歩いてゐるか。白道は進むに從つて歡び深く、進むに從つて諸趣の難多い處だと聞く。靜心を以つて、戒に身を固め、念佛の聲に護られて、赴くべき處まで赴きつきたい。（大正十一、十二、廿三日）

ある日の天香さん

朝、河村さん、啓文さんと三人で園を出た。今日は園の餅搗きなので、花園から金川さんも來て手傳つてゐた。

住友の別莊の前で、天香さんに行き會つた。毎年餅搗きには、搗き始めの一臼を師が搗かれることになつてゐる。

師は腕組みをして、頭を低く垂れてゐた。何か深い考へに沈んで居られるのであつたらう、其の軀も顔付も、私は今朝ほど嚴肅な師を見たことはなかつた。謙遜に、柔らかく、持して居られる其の軀の端々からは、嚴乎とした何物も決して犯すこと能はざる威容の内に潛んでゐることが瞭然と現はれ、觀取せられるのであつた。何といふ嚴肅さであらう、けれども、亦、何といふ虔ましやかさであらう。師の下座の一相の中には、一切の戒律の心を含んでゐるのではないかと思はせられる。

私達は耻ぢた、師によつて自らにして耻ぢさせられたのであつた。

師の下座は、私達が憍慢なからである、師の悲しみは、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

私達が愚癡なからである、師の嘆きは、私達が貪慾なからである。あゝ、本當に濟まないことだ。わたし達愚癡な者のために、わたし達邪慾な者のために、わたし達貪婪な者のために、師は私達一切の者のために、その一切の十字架を背負てゐて下さるのだ。

私達が師を傷けることどれ程だらう。

師が胸を痛められるのは、みんな私達がつけた傷なのだ。

簡單に御挨拶しただけでお別れした。

師は、とぼ〳〵と寂しさうに歩いて行かれるのであつた。私は思はずその後姿を見送つた。孤影悄然……………本當に、此の形容の詞がそのまゝにあたるやうな寂しい後姿であつた。師が、此の頃は、深く決意する處あるらしいのを朧氣ながらではあるが察知してゐる私は、一層意味深く眺められたのであつた。

孤影悄然……………そして、その陰に深くつゝまれてゐる愛と、悲しみと、傷みと。

此の道や行く人なしに暮るゝ秋

靜に吟ひをはつて、暫らくは、眼を閉ぢたまゝ開かうとはしなかつたであらう芭蕉のこゝろが想はれる。そこに無限の寂寥がある、絶望の堂奥に、凝如（ぢいつ）と瞑目合掌して祈る寂しい彼が見える。

其處に大きな愛、深い祈りを持つ者の悲しみがある。眞實の一路を直入し、歩み入り行く者のみが知らねばならぬ寂しさがある。彼が愛すれば愛する程、罪から罪と我自ら我が罪を增大しつゝ、無限地獄のどん底に落ちて行かうとする人間の淺ましさ、愍れさがはつきりと見えてくる。彼の祈りが深く、神の胸に近づくに從つて、彼等と彼との間の距離が、餘りに激しく隔つて來ることを覺えねばならぬであらう。

救ひは、其處、汝等の眼の前にある。その道は、曾ては未だ開かれぬものであつたかも知れぬ、併し、今は、尠くも師によつて開かれ、同時に師によつて證（あか）されてゐるのである。此の道を行く者は救はれる、――罪あるも無きも、賢も愚も、貴なるもはた賤なるも、すべては等しく、同じ救ひの光の中に攝取せられるのである。

彼が現に示し・證して居る處の此の道を、なぜ彼等は歩

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

まうとはしないのか。行かざる者には達することは出來ない。信ぜざる者には、白道も水火のたけり、暴れ狂ふ呪ひの河とも、死の深淵とも觀えるであらう。

私は師の寂しさを思ふ、涙を一杯ためて、愚癡な、盲闇な私達を眺め入られる師の心の眼を想ふ。

『汝等小信なる者よ、信薄き者よ、我いつまでか汝等を忍ばん。』

其の信は巖の如くであると言つて、イエス自ら名けた處のペテロに對してさへ、彼は恁樣言はずには居られなかつたことが、その生活の中にはあつたのだ。いや、恐らくは、まことには不斷であつたであらう。

そして、私は恐れる、何といふ小信なる、信薄き私達であるのだらう、『我いつまでか汝等を忍ばんや、』と、あきらかに、師の口から私達の前に言はれるであらう日の近づいてゐることを。

師は、必らず、私達を怒つてをられることであらう。けれども、その怒りよりも、もつと強く、大きな愛の心は、罪苦惡業に呻めき惱んでゐる私達を、しかも、救はれやうとは精進せぬ私達の上を思ふて、悲しんで居られることであらう。

寂しい、寂しい、師の後姿、とぼ〳〵と、孤影悄然と歩いて行かれる師を、私はお詫びしつゝ、心の中に額づいた。

（大正十一年十二月三十日）

願はくば三惡趣無き世界へ

――大和の寺より東京の友へ（大正十年七月）――

東京を發つてから丁度今日で拾日目です。

お念佛と讀書と散策との間に、此の寺に於ける私の日々は、靜に穩に送られて居ります。自分で自分を流謫に處したやうな恰好で、此の山又山の中へ來た私ですが、此の流され人、自分に時に省みては餘りに和平に過ぎると思はれるほど、靜な、穩な心持で居ます。こんなに心の靜穩な生活は、恐らくは私の生れて以來經驗する初めてのものだらうと思ひます。それは周圍の柔い自然が、自然に私の心を柔らげ、鎭めるのだらうと思ひます。

東京から遠く離れて、殆んど人間とも接せず、只、終日、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

明けても暮れても、山とばかり面を向ひ合はせてゐる今、反て東京に於ける自分の生活の非が瞭然と觀え初めて來ました。

兎も角、此の寺に於ける幾許かの日の生活は、私に良い休養と、新しい活力とを與へるであらう、而して、東京の渦巻きの中へ、再び飛び込んで行く時、私は以前よりは更に強い力の所有者となつて居るだらうと思ひます。

人間が渦巻いてゐる東京、人生の流れが奔騰してゐる大都會、其處が奈何しても私には必要なのです、自己を眞人として完成せしむるために。

其處には、全自分を打つつけて行きうる凡ゆるものが在るからです、――善も惡も、美も醜も、清淨も汚穢も、極樂も娑婆も、天界も地獄も。要するに、人間が、餘りに人間的過る程人間である處の一切があるからです。

如是人間道こそ、私が生活々動の最も強き對象として取り、向ふ處のものであらねばなりません。それが人間に關するものである限り、私はその一切の核心の核心までも見盡し、見極めたく欣求してやみません。

私は善盡し、美盡せる極樂や天國よりは、矢張り此の娑婆と言はれて居る人間界が限りなく愛しく、戀しくてなりません。

私は淨土教徒です。私は彌陀如來を信ずる。故に私は彌陀如來を念じはするが、それは決して往生極樂を欣求するがためではありません。

淨土三部經を通じて、阿彌陀如來の精神に、就中その法藏界としての因位時に於ける衆生愛の熾烈なる精神に觸れた時、私の心は本當に強く突き動かされました。朧氣に感じてゐてまだ明には感得しえぬものを打ちつけられたやうな氣がしました。

阿彌陀如來を念じ、淨土教を信ずる他のすべての人々には、それは往生を欣求する心を發かれるものであるのでせう。併し、私には、單に往生奈何をのみ問題としてあることは出來ませんでした。四十八願に現はれた法藏菩薩の精

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

生命と光とを信じ、而してその無限無量であらんことを欣求する者は、また無量我として無量光としての阿彌陀如來を信じて、その佛名を口稱することを私は心からすゝめる。經所説の如く、假令一聲でも十聲でも宜しい。

衆生行を起して口常に佛を稱すれば佛即ち之を知りたまふ。身常に佛を禮敬すれば佛即ち之を見給ふ。心常に佛を念ずれば佛即ち之を見たまふ。心常に佛を念ずれば佛即ち之を知りたまふ。衆生佛を憶念すれば佛も亦衆生を憶念したまふ。(定善義)

と、善導和尚はその觀經疏の中に記してゐるが、若し本當に私達が欣求の心を以て稱名念佛するならば、その念に應じて彼の佛は、私達の心相の内に顯れ來り、生活の上に大光明を投げられるであらうことは信ぜられます。

觀經に——

『此の濁惡の處には、地獄餓鬼畜生盈滿して、不善衆多し。願はくば我未來に惡聲を聞かず、惡人を見ざらん。いま世尊に向ひて五體を地に投じて、哀れみを求めて懺悔す。

神、願成就の文に現はれた阿彌陀如來の精神、即ち佛心、即ち大慈悲心を、同時に亦我が心とし、本願として此の人生に命のある限りは生きて行けと示されたのです。

人生を愛せよ、衆生を慈しみ悲しめよといふのが彼の菩薩、彼の佛によつて、私に與へられた教へであります。

時間的には無限極に、空間的には無際涯に、生命と光りがある。

極惡趣の衆生にさへ、生命と光りとの何物かは、幾分かは與へられてゐる。その生命を思ふ時愛がある、それが虐げられ、否定せられんとする時苦惱が起るのであります。

生命は無量であり、光は無限である。

阿彌陀如來は曰ふ、『假令俺を信じないでも、汝が汝自身現に體得してゐる所の生命と光とをしるべとして、無限の生命を、無量の光を信じろ！　其處に俺がある

『如是生命と光との前に、汝の一切を投げ捨てて信奉する生活には、決して何物も障碍しえぬであらう。なぜならば、其處に於ては、最早、汝は汝であらぬから。』

唯、願はくば、佛、我をして、淸淨業の處を見せしめたまへ。』（韋提希夫人言）

大經に――

『我常に一切を哀愍し、度脫すべし。十方より來生せんもの、心悅淸淨にして、旣に我が國に到りなば、快樂安穩ならしめん。幸はくば、佛、我を信明したまへ。是れ我が信證なり。願を彼に起して、所欲を力精せん。十方の世尊、智慧無礙なり。常に此の尊をして、我が心行を知らしめん。假令身を諸の苦毒の中に止むとも、我が行は精進にして、忍びて遂に悔いざらん。』（法藏菩薩言）

大經四十八願の第一願に――

『設し我佛を得たらんに、國に、地獄餓鬼畜生あらば、正覺を取らじ。』

同經願成就の文に――

『又その國土には（中略）地獄餓鬼畜生の諸難なし。』

菩提を求め、そうして菩提を得達することが、此の不完全な極限された我々人間の生の意義であるべき筈です。究竟理想地に於ては、善は自由と合致する。凡ゆる私達の行爲は、唯其のまゝを以て道に適ふ所のものとなるであらう。それは絕對無礙自在であります。苦との相對を最早超脫した絕對樂であります。

生が限りなく愛されまた貴まれるのは、それによつて本質的なる快樂――法悅が與へられるからであります。意識的に營まれる生活は法悅を目的として働く、而して法悅は生を生として生かしえた處に現はれる。即ち法悅と生とは同一物の二面の現れと觀ぜられます。

然るに私達一切生物のその現實の生は奈何か。

生は念々に脅かされ、悅樂は苦艱の大量に壓倒されてる事實を、いやでも私達は觀ねばならぬのです。

人間といふも、其のまゝの生活は、人間として見るべ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

くは餘りに哀れに、餘りに悲慘なる者の、寧ろ、大部分を此の世に於ては占めて居ることを、私は私達自身の日常到る處に於て見、聞きする。否、そういふ自分自身さへもが、其の哀れなる、その悲慘なる一人であります。

韋提希夫人の悲嘆の聲を聞くまでもなく、或は地獄道の、或は餓鬼道の、或は畜生道の生活で私達の殆んどすべてはある。

私は決して彼等とは言ふまい、私自身さへもが其の實に同じき一人であるのですから。

私は淨土三部經を通じ、而して、阿彌陀如來を信ずることによつて、假令それは唯一人唯一佛であつたにもせよ、地獄餓鬼畜生の三惡趣なき淨土を開現することが出來たのであつたならば、其の一は、軈て將來さるべき百千を意味する所のものである。而して、亦、其の故に、此の地球上の人間界をも無三惡趣であらしめらるものであるとの信を得たのです。

私が全三經の中から特り此の無三惡趣の願を高張する理由は、現在の私達人間世界には、先づ此の願の實現が第一に切要せられて居るからです。

それを得て居らぬが故に、私達凡べては人間を人間としての眞實の生活が營まれて居らぬからであります。

或る者は言ふであらう――

『それは畢竟するにお前の惑であり、迷である。若し、一日頓悟するならば、其のやうな一切の相對見は絶破して、人生を、或は善惡、或は美醜、或は苦樂、と、觀、感ずる心も都滅するであらう』と。

私はその人に敢て言ふ――

『幸にして私が大悟を開き得た日があるとしても、私は決して御身か言ふやうな、其のやうな無關心な、冷淡な心の人には決してなりたくない。また、もし、其のやうな心境が悟りであるとしたならば、覺者、即ち佛になるといふことは、何といふ利己一片の卑小極る心情であらう。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

悟覺といふことが、若し其のやうな何事をも觀じ得ず、何物をも感じえぬ心的狀態に名るものであるとしたならばそんなものが結局何にならう。

惑迷を破却して、大悟を得達し得た時にこそ、其の時にこそ、私達は一層しつかりと、亦、强く、善を善と觀、惡を惡と觀じうるものであらねばなりません。

若し、私達が絕對善を認識しうるに到るならば、其處に於ては、惡を今よりは一層大きく苦しく感ずるやうになるであらう。又、而して、絕對美を觀ることによつて醜を、絕對樂を知ることによつて苦を、更に明瞭に識り、且つ、其の如きもの、存在を、堪へ難く傷むに到るであらうと思ひます、然うなるべきであります。

此の世界には、餘りに苦しみ惱んでゐる人多きが故に、慘ましく憐れなる者多きが故に、私は限りなく此の世界を愛し、悲しむ。

而して、私も亦その實に彼等の一人なるが故に、彼等の惱みに共に惱み、彼等の傷みと共に傷まずには居られません。

維摩經に曰く——

『衆生之類、是菩薩佛土、所以者何、菩薩隨所化衆生、而取佛國』

私達は人間を見ることなくして人生を識ることは出來ない、人生を識ることなくして眞人（トウルーマン）としての自己を完成することは出來ません。

出來るだけよく人を觀、人生を識りうることのためには、私達は一人でも多くの人に、心と心とを以て接し、人生に眞實の探險者の精神を以て打つかつて行かねばなりません。

阿彌陀如來は、その佛國中に無三惡趣を願ひ、而して成就した。私も亦此の世界、人間の生活の中に三惡四趣のあることにがまんがならないのです。

何といふ憤ほろしい、惱ましい社會であらう。

人間に對しては限り無き心を以て愛し、慈しめ、併し、

誤れる不正なるものに對しては、正しき怒りを以て紅焔と燃えて憤ほり、悪(にく)みうる者となれ、と、阿彌陀如來の大慈悲、衆生愛の心は、彼を信ずる者の心に悟るであらう。

限りなく愛しく、悲しいのは此の世の人間道です、此の世界を此のまゝに極樂化することは出來ぬであらうか、切めて無三悪趣であらしめることは不可能であらうか。

親愛なる友よ！

私は、此處で、私の傷つき疲れた心と軀とを、充分なる休養に由つて癒やし、更に新らしい元氣と力ともつて、凡ゆる種類の人間と人生との渦巻き、奔騰してゐる其の大都會へ歸ります。

私は、幾度でも、倒れたら、傷ついたなら、更に強い信と力とを以て起き上ります。假令それが七度の七十倍であらうとも。

* * * * * * * * * * *

天華香洞錄抄　天香

智識階級の承認せんことを願はざれ。天理教祖も、學者と金もちあとまわしといひたりとかや。

しかしてまたその恩恵によらざれ、淨財にはみ淨信により淨智をのみ用へよ。懺悔の心なき智識階級の力を用ひざれ。もし用ひなば彼等をしてその功なき力を尙捨つる能はざらしむるなり。別に國を建てよ淨土を建立せよ。天祐の保全により、聖天子は必ず之を嘉し給ふ。

○本號表紙題字　嵯峨天皇の宸翰より頂きました。これは平安朝文學に大影響を及ぼしたといはれてをる唐の李嶠の詩集をものせられたもので、原本は帝室の御物でございます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

岐阜托鉢記

失名氏

海野鏡圓さんの假寓は仙波將軍の別莊兼農園です。流石に將軍の御氣に入りの土地こて、こつ／＼耕すにはふさはしいです。この農園に現れなすつた將軍は、みるからに一個の好々爺であります。枯淡な快活な人格が農園の樹木の配置にも表現されてみえます。何處かのお百姓の爺さん、大層元氣ぢやな、こ思つて近寄つてみるこ、將軍が盛んに馬糞を兩手で握つて、せつせこ、桃や葡萄にくれてゐなさいます。

『好う……御機嫌かのう……』あゝ、そのタイプ、その口吻。知らずして將軍の人格にうたれ、頭がさがります。

『閣下、好く精がお出でゞ御座います……』

『欲ぢやあなけれご。欲こみえるかのう?』

私は一句も出ませんでした。

「この勢でこそ、過ぐる日に、天香さんがお見えの折、天香さんにすつぱ拔かれぬ先に、奥の便所のお掃除をなすつたな」こ記憶が甦つてそゞろ微笑まれました。

農園の中頃に氣のきいた小莊があります。裏は明い感じのする松山です。矮い松の枝振がこの山の氣分にぴつたりあつて、巖の自然の配りが良いので、訪問の御客樣はきつこ一度は、山に遊ばれます。

春はまだ淺う御座います。午後の暖さに主客は打連れて登山しました。

頂きの松の下影で眺むる景色の好さも、あはい疲れの心地好さは、忘られない記憶です。眼の前に木曾川が流れて白帆が見えます。西に白蠟のやうに光るは長良川です。東に各務が原の飛行場がみえます。その山麓に犬山城もみえます。目の前の地平線が天にくちずくあたりに名古屋城がそびえてゐます。後には、近く金華山城が現れてゐます。ぬつこ突き出た巖の凹面に持參の鐵瓶を懸けて湯を沸しました。番茶を味ふ時の氣持好さ、皆さんの充血しきつた顔に、夢の樣な軟らかい微笑が見られました。

松の枯枝を背負つて下るうち、うつかりして他樣の山に足を踏み入れて、泥棒呼ばりにされました。その時は松の枝間に日が射してゐました。皆樣の顏色にも夕日が映つてゐました。私は何だか面白く成つてひこりくす／＼笑ひました。

梅の香りが靜かに山莊内へ漂つて來ました。孤燈をかこ

んで信仰のお話がはじまります。室内に落付いた氣分が漲りました。早春の膚寒い夜氣があるかなきかの風で流れこんできます。そうして敬虔な雰圍氣に一切が包まれてしまひました。親鸞直筆の御文の色々や、其の時代の高僧方の筆跡に接しまして一じほ聖人の心持ちに沒入することが出來ました。その夜は打ちとけて、藝術の話も出まして、取わけ懷しい印象として頭に殘つてゐます。

海野樣をはじめ、同行五人で、二十日のおひる過ぎまで富田女學校の寄宿舍の便所の御掃除をさせていたゞきました。妙齢の生徒さん達が、妙な顏付をして見てゐられます。二階の窓からのぞいてゐられます。終にはたへられなく成つて丁寧に御挨拶をなさいます。水を掬んできなさいます。私達自身の爲にやらしていたゞいてゐるお仕事を、いと親切に御手傳ひ下さいます。親鸞聖人の往相廻向の心持をはつきりと味はされて、泪が顏に傳りました。敎育と言ふことに付いてもどうやら、その生命にふれた樣な氣が致しました。

持參のお握りを開いて、板の間でいたゞきました。梅原眞隆さんの「一握の飯の試練」のことを思ひ出して、首をひねりひねり考へながらたべました。杉山さんが初めて食べる『惠みの飯の甘さよ』と、さもうれしげで御座います。

午後は去る寺院の御庭のお掃除で御座いました。折しも說敎がはじまつてをりました。浪花節の樣な調子です。門先さに白痴の小人がけらけら笑つてゐます。同人の杉浦さんが合掌して十錢おあたへになりました。この夜は、市橋琴樣の御宅へ上らせてもらひました。書齋に萬卷が連ねてあります。

『書籍の背で來客者を驚かす趣向なのです。僕は讀むとて本を買つたんぢやありません。』と面會しなにおつしやいます。聊か小生も面くらひました。氏は深刻な人生觀を持つてゐられます、重に露西亞ものの影響と存じます。

『あくびは人生の產物だ、女にもあくびしてしまつた。お金にもあくびしてしまつた。生にもあくびしてしまつた。死を想ふことにもあくびしてしまつた。何だか人生が面倒くさく成つてしまつた。』と言ひなさるかと思ふと、澄み切つた悟道の奧義を申されます。今度は淨瑠璃が出ます。端歌が出ます。何故の歌か。氏は大層惱んでゐなさるらしい。見る目にいたいたしう御座います。

隅の方で原田七郎さんがだまりこくつて、ゐられます。雨が降つても、風が吹いても動かれそうにも、みえません。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

だまつてゐる時に如來樣の動きがみえる。眠つてゐる時は考へないから惱がない。と言つた樣な顏付きで御座います。

二十一日は澄み切つた春日和です。今日は天香さんのお見えに成る日で御座います。『御父う樣にあへるのだ』朝の御飯が特別甘う座いました。

佐々木女學校へ御掃除に參りました。三河の龍燈園の方が三人托鉢に來てゐて下さいます。それに中村さんと、杉山さん、松浦さん、仙波樣の御女中樣、海野樣と私とで、今日は同行九人で御座います。

わづか二時間で要所要所のお掃除は一切すみました。ひとへに光の力と、思はず合掌しました。講堂で海野樣が一場のお話をなさいました。「ツルゲイネフが乞食の手を握つて『おい兄弟』と言つて泣いた」となど話題になつてゐました。

折しも仙波閣下から電話がかゝつてまゐりました。天香さん十二時過の列車でお着きなさる。同行九人との御知らせで御座います。電話機を持つ手が、うれしさで、かすかにおのゝきます。

午前十時頃から、また富田女學校へ御掃除にまゐりました。一昨日の殘をやらせていたゞくのでした。こゝでも、天香さんの御代理に、一寸と海野さんが御話になりました。私が迂然(ウツカリ)してゐる内に皆樣はお掃除をすまして、西別院の方に御出かけなすつたとかやらで、影も形も見えません。どこを見てもきれいにお掃除がして御座います。餘り仕事が早いので驚きました。

本願寺西別院は今日天香さんの御話のある會場なのです佛敎靑年會の主催だそうです。

廣いお庭を、三々五々と、洋服の紳士、淑女、商人、職工、學生、あらゆる方面の人々が、光の世界に集まつてまゐられます。會場は當院の敎務所です。一時過ぎには最早千人近い聽講者を入れて、滿員でした。

海野樣が前座でお話になりました。本願寺の別院内で、堂々と、寺院生活の矛盾を說かれるので、會集の人々が、いづれも顏見合はされました。

天香さんの御話の模樣は、こゝにはわざと省きます。「懺悔の生活」發行前の天香さんと、此頃の天香さんとは大分ちがつてお話が上手におなりなさいました。感慨無量で御座います。

その夜は、篠田樹一樣とて、この地の金滿家の御宅でお話になりました。ここも、六七百人を入れて、大層な盛會

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

で御座いました。店の外の往還に立聽きをしてゐなさる方が、大分御座いました。

翌朝は、托鉢者が十八人も御座いますので、二組に分れました。御婦人の方々は縣立女學校へ海野樣がつれてまゐられました。その日、仙波閣下のお孃樣も一しよに、お掃除をして下さいました。托鉢見物が大勢で、碌々お仕事が出來兼ねる程で御座いましたそうです。私は、鈴木五郎樣達、男のお連と絹紡會社の便所の御掃除をさせていたゞきました。廣やかな會社で御座います。皆さん、分れ分れに各便所に入られました。會社に務めてゐなさる老婦人がいぶかしげに尋ねられます。

『まあ、お若い貴殿達が、なぜ、こないな處の便所掃除人夫にお成りなさいました。不具者か、おいぼれでなければ、つとまりませんよ』

心こめて心配して下さいます。一寸返答に困りました。

それでも、歸る頃には、大層な御機嫌で、御禮なぞ申されました。

女工さんの寢顏が衰へて鉛色にみえます。これ丈完備した工場でも、これ迄に人體が衰へるのかと思ふと、ぢつとしてゐられません。考へさせられました。女工さんも、白粉などぬらない方が體の爲だと思ひました。

天香さんも大層御勞れと存じます。僅か四五時間利用して、絹紡、縣立女學校、富田學校、佐々木學校と、目まぐるしい程の御活動で御座いました。

午後一時何分の列車で一行は京都へ御立ちに成りましたプラットフオームでお別れしました時、殘され行くものの悲しみをかすかに味ひました。

たよるから、この悲しみがあるのだ。と言つて、たよらないではゐられない弱いものを私は持つてゐます。そこに人間としての寂寥があります。

○

『西田や海野の樣なものと、機を通ずるならば、もう別院は會場に貸さぬ。ちと別院の面目を尊重していたゞきたい』と佛教青年會宛の抗議があつたそうです。

我々は別院の生命を尊重して活用するのです。そないに解らず屋ばかりなれば、もうお金の御用の節はお免こうむる。』とはね返へされて、結局、お坊さんのなき寢入となつたそうです。

○

海野樣が岐阜に來てから、大分精神界にも光が輝いて來

た、戸本君の血まなこの活動には驚いてしまふ。

『今度は一燈園の天香さんとかやらが來なすつた。まあこれで、岐阜の宗教界にも新氣運がむいてきたわけだ。』とは道行く人々の風聞で御ざいます。

○

西田さんが御歸りになつてから間もない頃の出來事です市外のある本願寺派の寺院の門先に、「讀經賣買御斷り」の札が懸けられました。その寺の青年僧侶は氣狂ひあつかへにされました。

ふと、私は出懸けて見る氣に成りました。

面會早々、

『君はなぜ家に還(かへ)つて托鉢をしないのか、僕は西田や海野が、捨てよ、捨てよと言ふが、大體あれが一番氣にくはぬ、寺を捨てなくつたつて、「懺悔の生活」は出來ると思ふ。實は天香さんの捨身の思想に反對して、この通り「讀經賣買お斷り」と廣告したのだ』と。

私は私の知れる限界において、捨身と言ふことを御話申しました。やうやく、納得出來て、それ以來伊藤證信樣のお話や海野さんのお話に參會されます。

○

『なんだ、某々醫師の奥樣は、一燈園生活の眞似ごとをして毎朝、他人の庭迄もお掃除をなさる。吾輩は、人眞似が一番きらひだ』と申してゐなさる中年の方がありました。

ある日、市内を散歩してゐると、共同便所がありました。いつも大層不潔な便所です。二十餘の青年が、向ふはち卷で眞劍にお掃除をしてゐられました。何か氣付いた所があつたものか、その中年の方も明朝以來、未明から起きて、盛んにお掃除をなさいます。とは、ある人からの茶談で御座います。

○

ある日海野さんが、某將校さんの御宅の前を御通りになりました。ふと氣付いて、お庭のお掃除をなさいました。まだ奥樣が一驚して、早速便所の御掃除をなさいました。まだ十二の孃ちやんが、皆の知らぬ間に臺所を淸潔になさいました。それ以來、家の中が明るく成つた。光が明瞭り味へたと申されます。私もそのお宅の御孃樣御病臥の折は、ふつゝかながら御看護にあがりまして一方ならぬ御厄介になりました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

『愚學精舍』

れんしや

同人の松井愚學さんが今度家を持たれました。その家を私達は假に『愚學精舍』と稱んで居ります。精舍といふ佛語が嚴密なる意味に於て之れに適應するかどうかは研究を要することですが、兎も角、然う稱ぶやうになりましたのは、其の家の持ち方が、普通の家、或は家庭といふやうなものとは全然異なつた別の精神から成り立つたもので、即ち、倶に光の道を歩む者のため、一の道場、一の安居場所とし、併せては、若し將來に良き配偶者があつたならば、此の生活にはつきりと心身生活の三密をおく者によつて造られる家庭ともなしたいといふやうな考へ、願ひから出來たものであるからです。

愚學さんが、此の精舍設立の主旨について書かれたものゝ一節に――

悲願を樹てゝ一家を構ふ、深く祈る處あるによる。

一は以つて光の名に依りて淨化されたる家庭の規範を示し、光化されたる家庭を事實の上に證せんがためなり。

一は以て外護のかたちに於て、同人と共に深く祈る處たらしむるがためなり。

外護といふも、自分の心持としては、眞の外護の意に非ず。同じく白道を歩めるものとして、唯、單に、園を外にして祈りの場所を持つといふ意味に於てゞあつて、自分の家に於て同人とゝもに一食をとるとしても、或は足袋一足を惠むにしても、自分が同人に惠むに非ず、食せしむるに非ず。ともに光有のものを、我人倶に頒たれるに過ぎざるなり。（以下略）

と、あります。

愚學さんは大阪〇〇新聞の記者をして居られた方で、初め、記事を取りに園へ來られたのが發心の動機因緣となつて、直ぐに一燈園生活に入つて了はれたのです。支局長の懇請によつて、餘義なく形だけは記者として、昨年一年を新聞社の方へ托鉢し、休む家は又別に托鉢に行つた友人によつて惠まれてゐたのです。其の間は勿論俸給を受けず、すべては他からの供養によつて居られました。斯うして、一通り一燈園生活を體驗されたので、更に進んで宣光社としての單位に身を置いた生活を味つて見たいといふ考へか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ら、最近に到つて、再び俸給を受け、托鉢をしてゐた友人の家を辭して、此の精舍を設けられたのです。

處は一燈園から三四丁下つた、矢張り鹿ヶ谷櫻谷町で、ある家の二階六疊二間を借りました。二階借りで精舍と云ひ、道場と云ふと、人は狂人のやうに、誇大妄想狂のやうに私達をお思ひになるかしれませんが、併し、それは形や建物の問題ではないと思ひます。若し其の心なければ一國一郡に跨る大厦高樓と雖ども猶廣しといふこと能はず、若し其の心願正しければ、一疊の小室も猶よく百千の人を容るゝに足ると思ひます。維摩居士方丈の病室は三萬二千の大衆を迎へて猶餘りあるものでありました。家ありといふも畢竟は空寂の舍、一時假に某の所に定めたゞけのこと、時に應じて在り、時に應じて又無くなることもありませう。靈光の命ずる處に從ふまでゞす。

二月一日此處に移りました。同十三日に天香さんにおいでを願つて、愚學さんを初め同人數人で般若心經と維摩經偈を讀誦して、精舍開きをいたしました。

委しくは、他日機を見て、誌上で發表させていたゞきます。初めての試みでありますので、光の友なる方々へ御挨拶代りに、要だけを簡單に書きました。（大正十二、二、十五日）

友を思ふ

かなめ

これの世にありてすくなき吾が友ぞ
貧しき故に心亂すな

難しきことゝて言はぬこの友の
笑顔を見れば心とけにけり

言葉拙く起居淋しきこの友の
眞實は顔に現れて居り

この友にこの妻ありと吾言はめ
起居淑けし吾が友の妻

言葉拙く笑みては居れど端々に
心はとゞく吾が友の妻

蒼空に透きてか細き梅が枝に
春めきそめし陽は流れたり

莩殼垣添へて馬曳く人の影
しづかに動く朝の日射しに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

柿の立木を柱に

横濱一燈園　松村　白彦

横濱の市街はずれ井土ヶ谷の乘蓮寺の山の中腹に横濱一燈園が建てられた。

こゝの地主さんの親類の息子さんが自然生活の要求にせまられて自分の手で一坪五圓餘りで四坪餘の小屋をお作りに成つた。其の中に奥さんが赤ちやんをお生みに成つて色々と不便を感じる事もあるので山を下りて町の方へ一戸を借りられた。

それが昨年の眞夏であつた。其家を乞食の住家にするのも面白くないと思はれて友達で一燈園に緣のある方にお話になつた結果改めて一燈園に供養して下さつた。

夫以來二三人の同人達の手で朝夕手入れしながら保たれてゐる。この二月に同人が一人西國順禮に立たれて今では二人で托鉢に餘念なく暮してゐる何分横濱は土地的にこの生活を理解して下さるお宅がまるで少いので同人達の托鉢もなみたいていでない。

先日もこんなことがあつた。

同人の方が或る富豪のお宅へ托鉢に行かれたら、「せつかくだが、お斷りする、それももう三四年前の景氣だつたら店の方にでも働いてもらひたかつたが」と言はれた。

黒い筒袖がなんとなく商人に見えるのか時々「何屋さん！」「魚屋さん」「質屋さんの番頭」などと面白く呼ばれる。質屋さんはどうも振つてゐる。それに、私のかつこうが如何にも奇妙に見えるのか巡査さんの眼の光ることが大變多い。

つひこの一月にお隣の乘蓮寺で私達の托鉢でひかり會日曜學校が生み出された。祈りも形式も大變一燈園化して謡なども童謡を用ひてゐる。托鉢の歸へりなどに子供達に會ふと「先生」と呼びかけられて、ひやりと汗ばむことがある。これにはかなり恥かしい、心苦しいことを感じることがある。でも和尚さんや町の小學校の先生達や父兄達が何により喜んで下されるのがうれしい。

横濱の一燈園は俗に柿の木の家だの、山の家だのと言つてゐるが、二本の柿の自然木を柱にして建てたので一寸凝つてゐる。

「もう二年はもちますまい」と下の老人が話してかへられた。私はじつと立ちすくんで屋根をながめてゐる。向つて左手の柿の木は大變心持よく伸びてゐる。昨日の雨が大變漏つて閉口した。一層のことこんな落着かないものなら園のない方がよい、一燈園生活は十字街頭の托鉢だから。でもある以上は出來るだけ心持ちよく保ちたい。

朝は十時過ぎになると陽がかん〱と園の一間餘りのぬれ緣に差込む、そうすると六疊餘りの室がぱつと黄ばんで、何んとなく落着く。火の氣のない園にはこの自然の火が何より結構なごちそうで晩の四時頃までは大丈夫もつ、壁の代りのアンペラが大變凝つた作りではあるがこの頃の寒さと風にはじつとしてゐられない。床柱の柿の葉はすつかり落ち六七本の細長い蔓の樣な枝が天井に向つてはひ上つてゐる。同人の珠數がその小枝にかゝつてゐる。床の正面には觀世音菩薩の座像が靜かに安置してあつて其の前に香立、線香、花瓶などがちらばつて經文バイブルもうず高く積んである。それに同人の生きながらの卒塔婆が立つてゐる表面の文字がおかしい眞中に眞赤な十字架が書いてあつて左に寺の和尚さんの南無阿彌陀佛、上の方にお光が書いてあつて、法名が又奇拔である。施主が乞食の兒、行年二十一歳とある。當人は娑婆の風にすれた顔付して白い齒をむき出して笑つてゐる。

壁にはクリスト、佛陀、親鸞の畫像がある。朝夕同人達はこの卒塔婆をながめてイエスの再生を身にしみて味はつてゐる。一寸皮肉だが教會でイエスの再生を證してゐる牧師さんには味はへない樣に思ふ。何だか乞食の兒には眞の救ひが、惠まれた樣に感じる。

電燈のない室で細雨の暗夜などはことに淋しい。自然泣きたくなる程寂しい。時々下の豚小屋からはほえる樣な奇聲が響いてくる。

同人達は氷のはつた四日程前のくみ置きの水で氷の片と一緒に顔をもむ樣に洗つて其の元氣でほつとして山を下りて托鉢さきに出かける。

大正十二年三月三日印刷納本　代金
大正十二年三月十五日發行　廿錢
東京市牛込區原町三丁目五十三番地
編輯兼發行 兼印刷人　中桐確太郎
印刷所　株式會社一匡印刷所
東京市牛込區原町三丁目五十三番地
發行所　東京宣光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

Vest-Pocket Series of MasterPieces

ヴェストポケット傑作叢書

定價壹冊 金五拾錢 送料四錢

内容は、當代名作家の傑作を選び集めたるものなれば諸君は本の撰擇に煩はさるゝなく、體裁は、感じよき最小型なれば、特に机上に擴げて、讀者のために特別の時間を費す要なく、常にポケットに携へて、或は仕事の餘暇に、或は途上に、諸君は最も手輕に、しかも最も總括的に當代最高の藝術を玩味し得べし。即ち之本叢書の特長なり。このめまぐるしき現代の文化生活の渦中に處して常に新しき藝術に觸れんと欲する者は、本叢書につかざるべからず。

1 恩讐の彼方に（他三篇）七版 菊池寛
2 忠直卿行狀記（他五篇）七版 菊池寛
3 戯作三昧（他五篇）五版 芥川龍之介
4 地獄變（他六篇）五版 芥川龍之介
5 生と死との記錄（他二篇）五版 豐島與志雄
6 若き日の話（他四篇）五版 豐島與志雄
7 若杉裁判長（他五篇）五版 菊池寛
8 蘭學事始（他四篇）五版 菊池寛
9 或る日の大石（他五篇）五版 芥川龍之介
10 芋粥（他五篇）五版 芥川龍之介
11 良友惡友（他五篇）五版 久米正雄
12 心中後日譚（他一篇）五版 久米正雄
13 麒麟（他二篇）五版 谷崎潤一郎
14 金色の死（他三篇）五版 谷崎潤一郎
15 受驗生の手記（他一篇）五版 久米正雄
16 勝負（他二篇）五版 里見弴
17 彼と小娘（他四篇）五版 里見弴
18 お國と五平（他二篇）五版 谷崎潤一郎
19 海神丸（長篇作）五版 野上彌生子
20 未定
21 未定
22 未定

東京日本橋通
振替一六一七

春陽堂

電話本局五壹
全國書店販賣

一燈園 西田天香著

◆

定價貳圓廿錢
書留料拾八錢

四六版黒布
表裝四百頁

新刊

托鉢行願

苦悩に満てる人生混沌として闇き社會を救はんがため二十年の星霜を懺悔奉仕の托鉢に送りたる天香師が虔しやかに世に贈るこの尊き我等の福音書を見よ

師の日常生活は、人の家に入りて下駄を揃へ庭を掃き便所を潔め納屋を整理する、一見殊更に奇異を装ふ如く見ゆれど、然らず、一切の我執に放れ心欲を擲ち、不二の光明によつて復活新生する。世間一切の罪悪何人がその責を脱るゝを待べきとして、懺悔の心からなる十字街頭の奉仕をする。一燈園に心の庵を結ぶと雖も別に一宗を立てるにあらず單に一宗に偏るにあらず古今聖者の光を仰ぎ徳を頌し、その遺されたる事業――人間苦世界苦救濟の願を成就せんとするものである。この祈願に即した實生活――もたず、うらずして人天のくやうに生きる天香師の全姿態は本書の殘らず盡す所である。

相馬御風著

大愚良寛

越後の隱聖良寛和尚の人格と藝術はその歿後百年に近き今日突如として異常の光輝を認められた著者は良寛研究者の第一人者として識者に知らる。

定價二圓七十錢
書留送料十八錢

東京日本橋通
振替一六一七

春陽堂

電話本局五一
四二一〇

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN